

# I 都市の現状と課題

# 1. 都市の概況

## (1) 位置・地勢

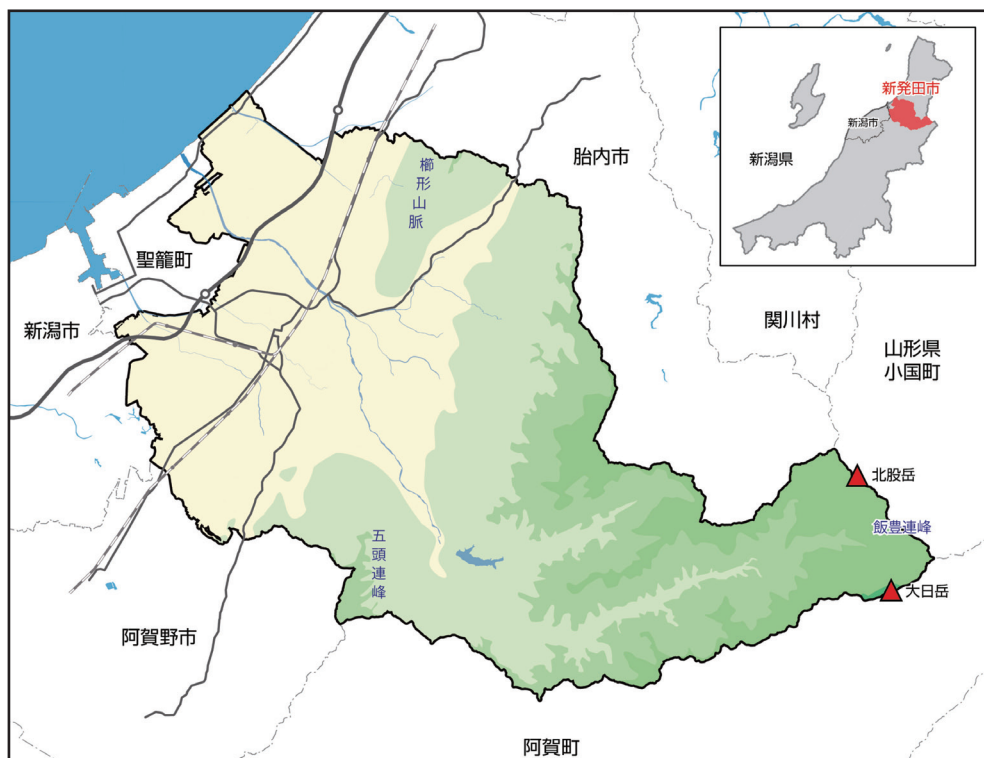
本市は越後平野（新潟平野）の北部に位置する新潟県北部の中心都市です。面積は533.11km<sup>2</sup>で、60%以上を森林が占めています。

西部は隣接する新潟市・聖籠町から平地が連なり、北西部は日本海に面しています。北部から東部にかけては、胎内市と、飯豊連峰の山々を挟んで山形県小国町も接し、南部は阿賀町、阿賀野市と接しています。東部に広がる山地部は、大日岳（2,128 m）、北股岳（2,025 m）などの飯豊連峰の主稜線を含み、その大半が国有林野となっています。

山地と平地の境界付近には、北東から南西方向に櫛形山脈、五十公野丘陵、笹神丘陵及び五頭連峰が連なっています。

市域の西部を占める平坦地は、飯豊連峰に源を発する加治川、二子岳から流れ出る姫田川などにより形成された扇状地性低地、三角州性低地、砂丘間低地からなります。

北部は紫雲寺潟を干拓して開発された地域で、水田地帯が広がるほか、畑地帯と松林が断続的に日本海まで続く丘陵地帯となっています。



新発田市の位置・地勢

## (2) 都市の成り立ち

慶長3年(1598年)に、新発田藩の初代藩主である溝口秀勝が入封し、城下町を形成しました。この時代に、城下町を中心とした茶道や和菓子の文化が形成されました。また、藩校の建設や、私塾・寺子屋が開設され、読み書き算盤が盛んになるなど、新発田独自の文化が培われました。

明治4年に廃藩置県がなされるまで国替えもなく、12代、約270年という長い年月にわたり溝口氏が治め、新発田城下町として栄えてきました。このような背景から、新発田城を始め、藩主の下屋敷である清水園や足軽長屋など、当時の風情を感じさせるものが、今も市内に残されています。

また、新発田藩はその領地のほとんどが低湿地帯であったため、干拓と治水に力が入れられ、現在のような稲作地帯が作られました。

昭和22年に市制を施行し、昭和30年に五十公野、米倉、赤谷、松浦、菅谷、川東の6村と合併しました。また、昭和31年には加治川村の一部、昭和34年には佐々木村と合併しました。

その後、平成15年に豊浦町、平成17年に紫雲寺町、加治川村の2町村と合併し、現在の新発田市となりました。



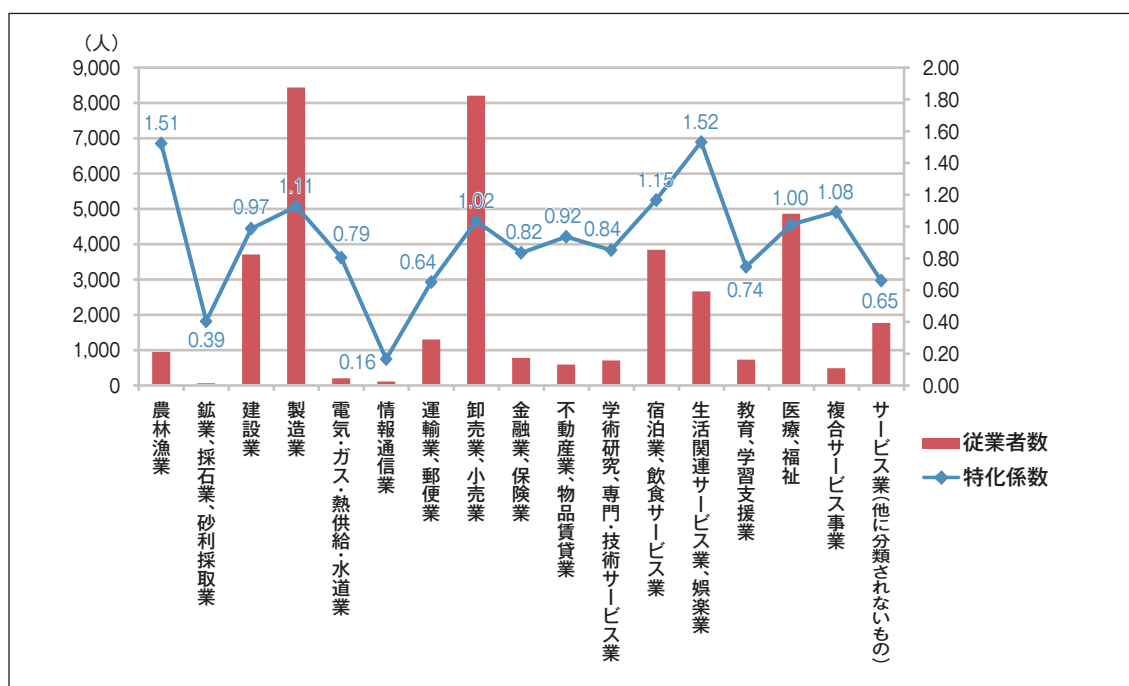
豊かな田園風景

### (3) 産業

産業別の従業者数では、製造業が最も多く、このうち食料品製造業が主要産業で半数以上を占めており、市内にはこれらの工場が集積する食品工業団地があります。次いで、卸・小売業が多くなっており、近隣地域を商圈とする沿道型商業施設\*の立地等の影響が考えられます。

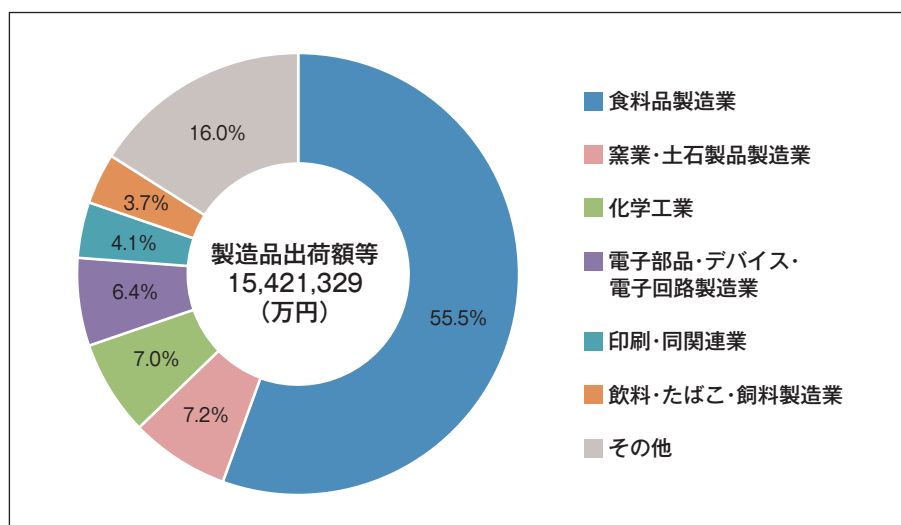
従業者数を新潟県全体と比較した場合の特化係数\*は、一定規模の市町村で大きくなる製造業や生活関連サービス業等を除くと、農林漁業や製造業、宿泊業などが多くなっています。

農業は、市域に広がる農地で稲作が中心に行われ、1次産業\*産出額は県内でも上位であり、県北地域最大の食料供給拠点となっています。



特化係数（新潟県全体と比較）

(資料：H28 経済センサス)



製造品出荷額の内訳

(資料：R2 工業統計)

\*構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても100%とはならない

## (4) 観光

市内には多様な観光資源が分布し、年間 250 万人を超える観光客が訪れています。

城下町として栄えたことから、新発田城をはじめとした歴史文化資源が市内各所に分布しています。その他にも、道の駅加治川や、オートキャンプ場と海水浴場が併設された紫雲寺記念公園、あやめまつりが開催される五十公野公園などの施設が分布しています。

また、市南西部に位置する月岡温泉は、市を代表する観光拠点となっています。

近年では、「全国うまいもん横丁」や「全国雑煮合戦」などの食に関するイベントも多く開催されています。



新発田城



しばたあやめまつり

## 2. まちづくりの現状と課題

時代背景や都市の概況を踏まえ、まちづくりの課題を下記のように整理します。

### (1) 人口減少社会への対応

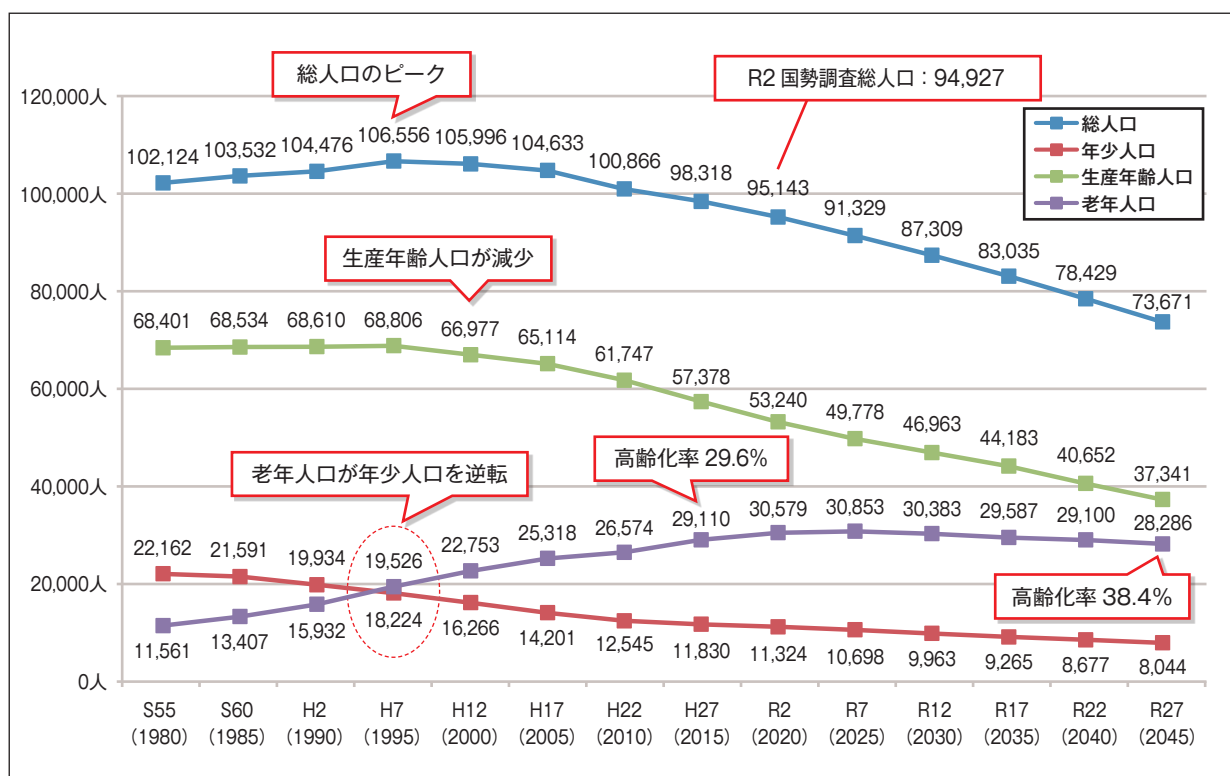
本市の人口は平成7年をピークに減少に転じ、令和2年の国勢調査では94,927人と、10万人を下回っています。

平成27年から令和2年の人口減少率は3.7%と、西新発田駅周辺など新たな住宅地供給の影響等により、県全体(4.5%)と比較して緩やかとなっていますが、今後も進行していくことが予想されています。また、このような人口減少は、中心部から離れた赤谷、米倉、菅谷などの集落地で特に顕著であり、赤谷地区では、昭和40年の15%まで人口が減少しています。

人口減少は、経済活動などの縮小のほか、空き地や空き家の発生、公共投資の財源の確保が困難になるなど、都市づくりに様々な影響を及ぼします。このことから、今後の人口減少を見据えた都市づくりが求められます。

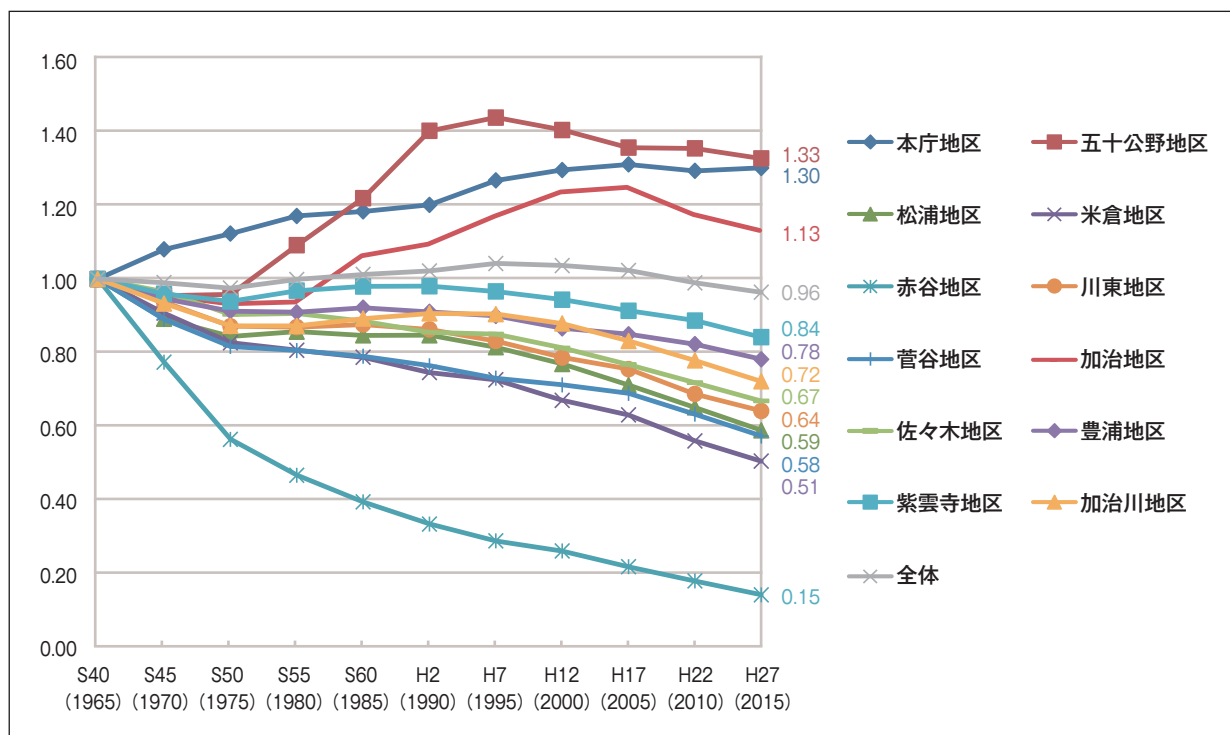
また、高齢化も進行しており、平成7年には老年人口が年少人口を逆転し、令和27年には、高齢化率が38.4%まで上昇することが推計されています。

高齢化は、車を運転しない市民が増加するなど、生活様式に変化を及ぼします。このことから、高齢化を見据えた都市づくりが求められます。



総人口と年齢3区分別人口の推移

(資料：国勢調査(～H27)、国立社会保障・人口問題研究所(R2～))  
 ※年齢不詳の人口を含まない



地区別人口増減の推移(昭和40年の人口を1としたときの値)

(資料：国勢調査)

## (2) 中心市街地を取り巻く環境の変化

本市では、平成12年に「中心市街地活性化基本計画\*」を策定し、その後、平成25年に改訂を行い、各種事業に取り組んできました。

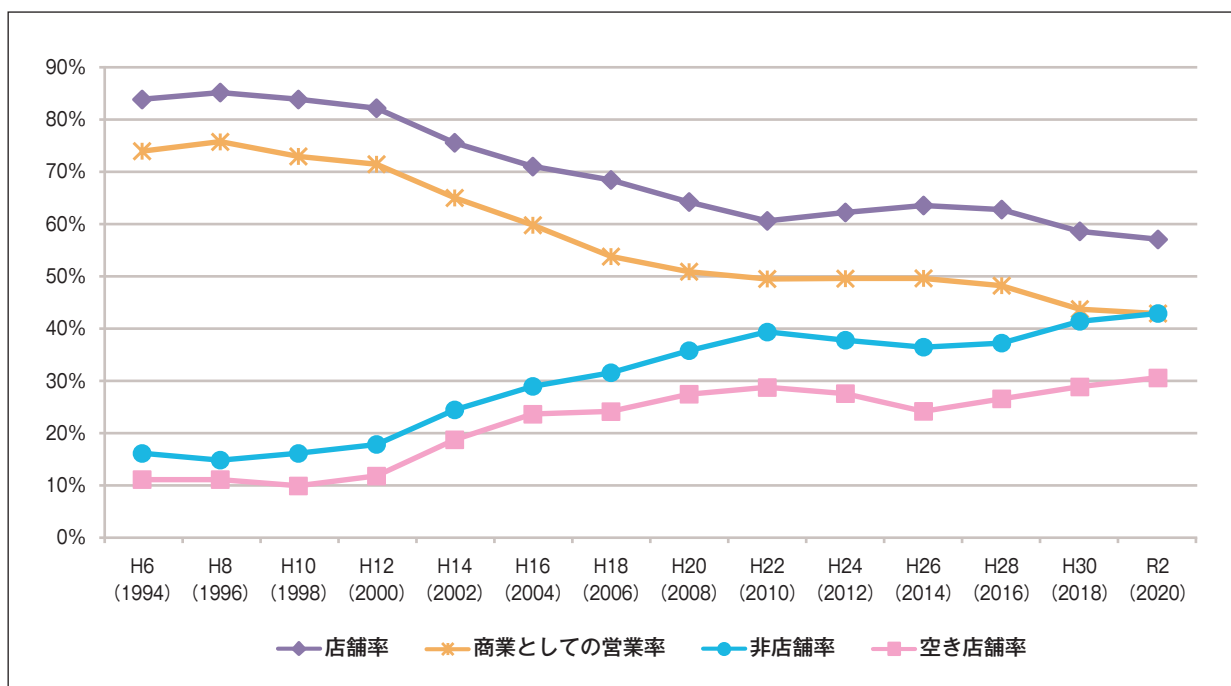
中心市街地では商店街などの商業機能に加えて、居住機能、行政機能、文化・娯楽機能の他、歴史的建造物・公園等の様々な機能が集積し、地域の中心的な役割を果たしてきました。

しかしながら、これまでの車社会化、大型店の郊外出店などを背景として、中心市街地の人口減少や高齢化の進行、空き店舗の増加等による商業機能の低下など、中心市街地の空洞化が深刻化しています。

本市の中心市街地には、新発田市役所をはじめ、図書館や健康長寿アクティブ交流センター、新発田警察署、郵便局などの多くの公共公益施設\*が立地しており、平成18年には県立新発田病院、リウマチセンターが駅前に移転、平成28年には「イクネスしばた」がオープン、平成29年には新市庁舎「ヨリネスしばた」が開庁しました。

また、令和2年には大倉喜八郎の別邸「蔵春閣」の東公園への移築が開始され、観光や経済の活性化に向けた活用が期待されています。

その他にも、中心市街地内には新発田城や清水園などの歴史資源が分布しており、このような施設等と連携した魅力ある中心市街地の形成が求められます。



中心市街地商店街の店舗率の推移

(資料：新発田市空き店舗調査 年度別結果)



### (3) 市民ニーズに対応した暮らしやすいまちの形成

これまでのまちづくりでは、人口増加、都市の拡大を前提とした「量的な向上」を図ってきました。しかし、近年では産業や文化活動が豊かに展開する「質的な向上」へ都市づくりは変化しています。

また、東日本大震災を契機とした防災意識や、環境問題への関心の高まりによる、自然環境保全や緑化の推進、景観への配慮など、良好な住環境を形成するためのニーズが高まっています。

この他、市民の価値観や生活スタイルが多様化するなか、地方都市にあって車社会化が、行動範囲を広域化してきました。こうした多様な市民の暮らし方やニーズに対応し、より多くの市民が「住みよい」と感じられるようなまちづくりが求められます。

### (4) 周辺自治体との連携によるまちづくりの推進

本市は、古くから県北地方の政治、経済、文化の中心都市として発展してきました。近年では車社会化による都市の拡大など、本市を取り巻く状況は大きく変化しています。

今後、全国的な人口減少が進み、都市間競争が激化するなかで、本市が今後も魅力ある都市としてあり続けるためには、都市機能の集積と周辺自治体との役割分担によるまちづくりが求められます。

本市では、胎内市と聖籠町と、ごみの共同処理や公共施設の相互利用など、生活に関わる分野でこれまでも連携してきました。今後もこのような体制を強化し、便利で暮らしやすいまちづくりを推進します。

### (5) 新たな社会課題への対応

近年では、気候変動等に伴い、水害や土砂災害などの自然災害が頻発・激甚化しており、これらのリスクを回避・低減させるためにも、環境問題への配慮や脱炭素社会の実現が必要です。2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」は、2030年までに、よりよい世界を目指す国際目標であり、「誰一人として取り残さない」世界の実現を理念に、持続可能な社会の実現が求められており、SDGsが目指す17の目標と169のターゲットに貢献するために、住み続けられるまちづくりに向けた取組を推進します。

また、情報通信技術（ICT）の飛躍的な進展に伴い、生活のあらゆる場面での活用が図られています。まちづくりにおいても、スマートシティ\*に代表されるように、ICT等の新技術の活用により都市の機能やサービスを効率化・高度化していくことで、社会課題の解決や快適性・利便性を含めた新たな価値を創造していきます。

このほか、都市を取り巻く環境が大きく変化し、世の中の不確実性が高まる中で、様々なニーズに的確に対応した、持続可能なまちづくりを推進します。

序  
はじめに

I  
都市の現状と課題

II  
都市の将来像

III  
分野別の方針

IV  
地域別の方針

V  
実現化方策

資料  
編